家事支援サービスを利用してみることの意味

― 他人が家の中に入ることへの抵抗感を考える ―

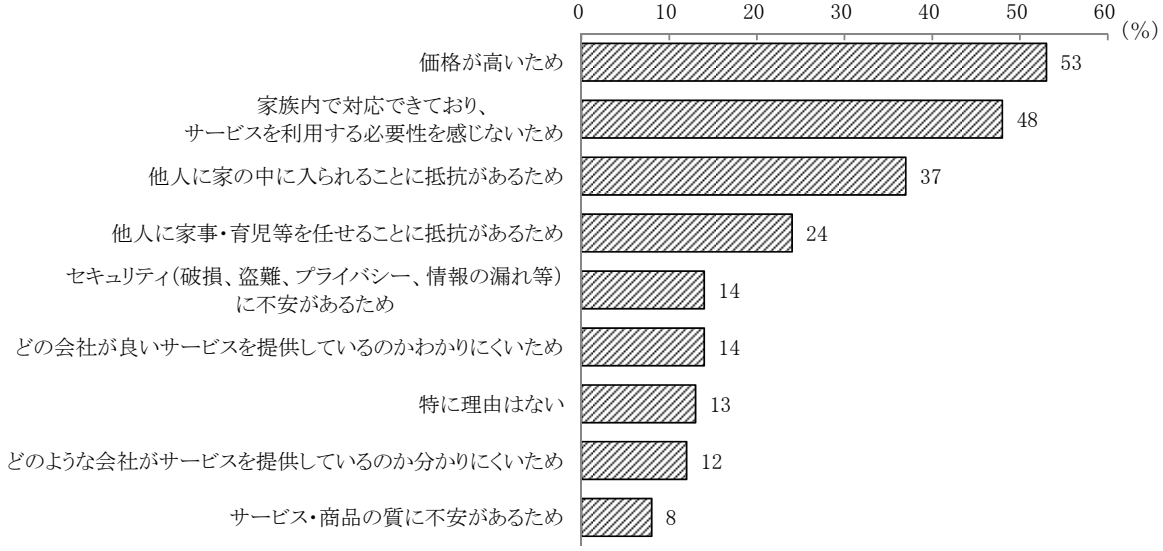
主任研究員 北村 安樹子

単身世帯や共働き、高齢世帯の増加などにともなって、掃除・洗濯や食事づくり、買い物といった家事支援サービスの需要が高まっており、関連事業の広がりは、女性の活躍推進や産業政策の面からも注目されている。このようななか、本稿では元気なシニア世代が自宅で家事支援サービスを利用してみることが、いずれ迎える可能性のある要介護期に備えてどのような意味をもつのか、という側面について考えてみたい。

＜家事支援サービス利用の主な阻害要因は「価格」と「抵抗感」＞

家事支援サービスと聞くと、限られた富裕層だけが利用するものというイメージをもつ人も多いだろう。実際、民間事業者が自宅で提供する家事支援サービスには、時間あたりの料金負担が３～５千円程度で１回あたり２～３時間以上、最低でも週１回以上といった条件でなければ利用できないところが多い。月単位での契約が必要ともなれば負担は数万円にものぼる。このため、潜在的なニーズはあっても、家計にかなりの余裕がなければ利用を躊躇する人が多いと考えられる。実際、政府の産業競争力会議に提出された資料でも、20～40代の女性が家事支援サービスを利用していない理由として最も多くあげたのは「価格が高いため」(53%)というものであった(図表１)。

図表１ 女性が家事支援サービスを利用していない理由＜複数回答＞



資料:産業競争力会議 雇用・人材分科会 2014年3月14日配布資料

(ホームページの掲載は2014年9月)

しかしながら、近年では都市部を中心に、週１回以上といった定期利用を要件とせず単発での利用を可能にしたり、サービス内容を簡素化・限定して比較的安価で気軽に利用できるサービスメニューを揃える事業者もみられるようになっている。

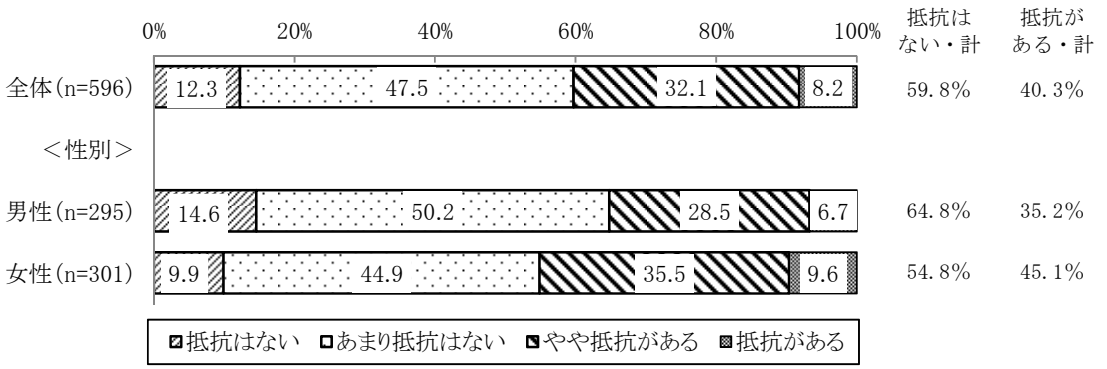
＜自宅に外部の人が入ることへの抵抗感＞

このようななか、価格とともに利用のハードルとなっているのが「他人が家の中に入ることへの抵抗感」であり、先の調査でも37％の女性がこの点をあげていることが確認できる。この「他人が家の中に入ることへの抵抗感」の背景にはどのような意識があるのだろうか。

この点に関連して、筆者が2010年に夫婦２人暮らしの60歳以上男女を対象に行ったアンケート調査に興味深い結果がある。家事支援サービスではなく、介護サービス等を受けるためではあるが、ホームヘルパーなどの外部の人が自宅に入ることについて約４割の人が「抵抗がある」（抵抗がある＋やや抵抗がある）と答えている（図表２）。

健康な人も利用する家事支援サービスと、介護を必要とする人が受ける介護サービスでは利用者のニーズやサービス内容が大きく異なるため結果の解釈には十分な注意が必要ではあるが、性別に比較した場合、抵抗があると答えた人は男性（35.2％）より女性（45.1％）で多く、半数近くを占めている。女性の方が自宅に外部の人が入ることや、自宅でサービスを受けることへの抵抗感は強いと考えられる。

図表2　自宅で介護等を受ける場合に、ホームヘルパーなどの外部の人が入ることへの心理的抵抗感＜複数回答＞



注：調査対象者は全国に居住する夫婦２人暮らしの60歳以上男女（当研究所の生活調査モニターで、要介護認定を受けている人や日常生活に他者の世話や介護を必要としている人は除外）。無回答の人を除く持家居住者の集計値。

＜抵抗感が強いのは自宅のどのような場所か＞

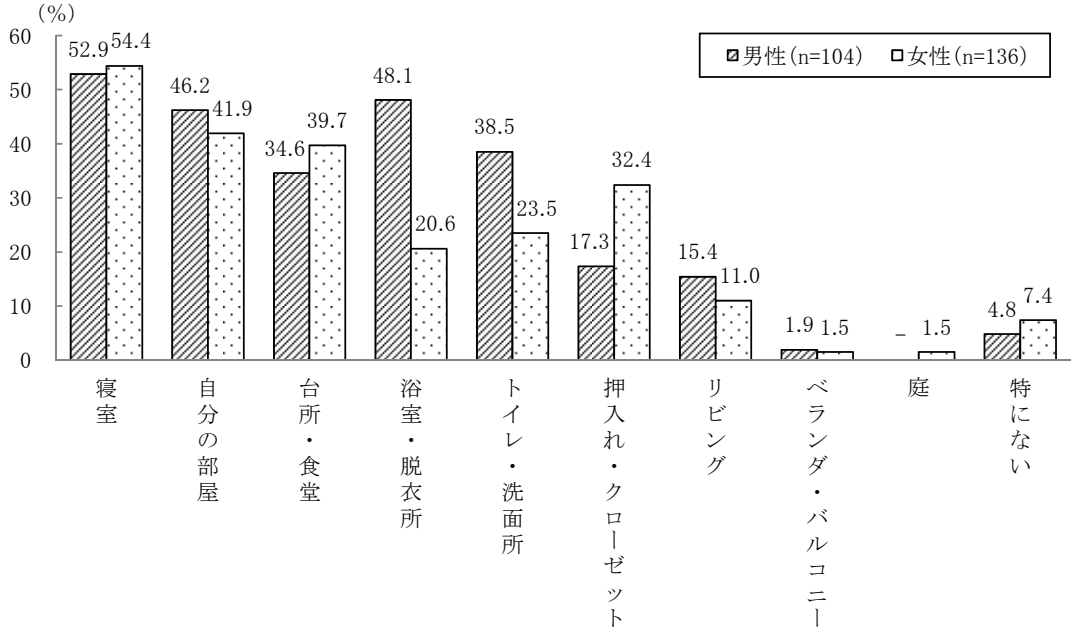
この調査では先の設問で抵抗があると答えた人を対象に、住まいのどのような場所に抵抗を感じるのかについてもたずねている。その結果、男女に共通して最も多くあげられた回答は「寝室」（男性 52.9％、女性 54.4％）であった。寝室は、自宅で介護

を受けるとすれば外部の人が入ることが不可欠であるにもかかわらず、その必要がない段階では抵抗感をもつ人が最も多い場所、ということになる。

また、「寝室」に続いて多くあげられたのは、男性では「浴室・脱衣所」(48.1%)、「自分の部屋」(46.2%)、「トイレ・洗面所」(38.5%) の順であり、女性では「自分の部屋」(41.9%)、「台所・食堂」(39.7%)、「押入れ・クローゼット」(32.4%) の順であった。興味深いのは、男性では「浴室・脱衣所」や「トイレ・洗面所」といった水周り周辺の場所をあげた人が女性より多かったのに対し、女性では「台所・食堂」や「押入れ・クローゼット」といった食事や収納にかかわる場所をあげる人が男性より多かった点である。これらの結果は、自宅というプライベートな生活空間のなかでも、外部の人が入ることに対する抵抗感の強さが性別や場所によって異なることをうかがわせる。

実際に、訪問介護・看護の現場では、自宅への初回訪問時に利用者が不安や緊張をみせたり、時には拒否的反応を示す場合があることがよく知られており、スタッフにはそれらの反応がむしろ自然なことだと捉えられている。家事支援サービスを提供する事業者も、利用者やその家族が自宅に外部の人を迎え入れることに対して抵抗感を抱き、その抵抗感の強さが性別や場所によって異なる可能性があることをスタッフに十分に意識させ、細やかな配慮を行うことが必要だろう。

図表3　自宅のうち、外部の人が入ることに抵抗を感じる場所(性別)＜複数回答＞



注：回答者は図表２の設問において「抵抗がある」「やや抵抗がある」と答えた人

＜元気なうちに、自宅で家事支援サービスを利用してみることの意味＞

一般に、元気な人が自宅で家事支援サービスを利用するというと、家事負担の軽減や時間面での節約効果が注目される。しかし、家事支援サービスの利用には、自宅に見知らぬ外部の人を入れたり、自宅で家族以外の他者から介護・看護や家事支援といったサービスを受けたりすることへの心理的抵抗感の体験という副次的な意味もあるのではないだろうか。

今は元気な人であっても、将来的に介護が必要になれば、多くの人は寝室をはじめとする自宅のさまざまな場所に外部の人を迎え入れることになる。例えば老夫婦の一方が介護を受けることになった場合、介護を受ける本人がサービス提供事業者の出入りを必要としても、配偶者は抵抗や気疲れを感じるかもしれない。このような場合には、例えば、部屋の使い方や家具の配置を変えてみることで、介護を受ける本人や同居する家族が互いの気疲れを和らげられる場合もあると考えられる。家事支援サービスを利用してみることは、自分や家族が外部の人が自宅のどこに入ることに心理的抵抗感を抱くのかを体験し、その理由はなぜなのか、どんな対処方法があるのかを考えてみるよいきっかけになる面があるように思われる。

（研究開発室　きたむら　あきこ）